



## CONTENTS

|   |    |
|---|----|
| ●年次報告書の刊行にあたって                                      | 3  |
| ■定例研究会  | 5  |
| 第1回「摂食障害からの回復—臨床社会学の観点から」                           | 6  |
| 第2回「メインストリーム文化と LGBT」                               | 10 |
| ■上映会  | 15 |
| ドキュメンタリー映画「ちづる」上映会                                  | 16 |
| 映画「ハンズ・オブ・ラブ 手のひらの勇気」上映会&トーク                        | 20 |
| ■他機関との連携・協力   | 25 |
| 共催・女性研究者研究活動支援事業総括シンポジウム「Life Sharing～共に前へ～」        | 26 |
| 後援・IGS 国際シンポジウム「なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか？」            | 28 |
| ■研究プロジェクト   | 29 |
| A「女性専門職の過去, 現在, 未来」                                 | 30 |
| B「メディアにおける男性身体・女性身体のセクシュアル化」                        | 31 |
| C「組織におけるダイバーシティー推進とその課題」                            | 32 |
| D「戦後の女性誌がライフスタイルに及ぼした影響」                            | 33 |
| E「現代フランスと日本のメディア言説によって構築された規範としてのカップル像の自己<br>／相互表象」 | 35 |
| ■業績一覧・2016 年度                                       | 37 |
| ジェンダーセンター運営委員業績一覧                                   | 38 |
| ●ジェンダーセンター運営委員会会議録                                  | 41 |
| ●ジェンダーセンター運営委員一覧                                    | 42 |
| ●編集後記   | 43 |





## 年次報告書の刊行にあたって

2016年度の情報コミュニケーション学部ジェンダーセンターの活動をご報告いたします。当年度には2回の定例研究会、2回の映画上映会、また大学の男女共同参画事業に協力しての活動などを実施いたしました。ほぼ例年通りの活動でしたが、ここ数年行ってきた国際的な交流事業や学生イベントなどといった特別企画はなかったために比較的穏やかな1年となりました。昨今、自治体が同性愛者に結婚に準ずる証明書を発行するなどの動きがあり、性的少数者の問題に関して社会的に話題になることが増えてきました。ジェンダーセンターでも昨年度実施した学生の企画によるLGBT理解のための活動や定例研究会でもたびたびテーマとして取り上げてきたため、外部からもジェンダーセンターの存在が認識され、企画のお誘いなども受けるようになってきております。実績の積み重ねの成果と喜ばしく思います。ただ、一般にはまだまだこの方面への理解は深くなく、誤解や偏見、拒否もまま見受けられます。今後の活動で引き続き訴えていきます。

ところで、2016年7月26日、神奈川県相模原市の知的障害者施設で前代未聞の凄惨な大量殺人事件が発生しました。犯人の、障害者は不幸で社会に有害だからその生命を奪ってもいいという殺人の動機が明らかにされ、こうした極端な差別意識を目の当たりにして震撼させられました。また別の一面として、アメリカの政権交替により新たに大統領になったトランプ氏の、アメリカ第一主義による特定国からの難民受け入れの拒否などに見られる、多様性の理解と受容とは懸け隔たった主張や政策、あるいは似たような自国中心主義を標榜する国家の動きが次々に報じられるなど、グローバルな時代に逆行するかのような事態も複数発生し、共生という価値観の共有の困難さを大いに考えさせられました。

このような時代だからこそ、当ジェンダーセンターとしては、小さなことでも引き続き理念に基づいた活動を続けて発信していかなければと痛感しております。ジェンダーセンターの理念では、ジェンダーの視点から社会的な様々な抑圧や不平等を直視し、さらに性差だけでなく様々な違いを持つ他者の理解につとめ、すべての人々が平和と幸福を享受できる社会の実現を目指すことに寄与するための研究や情報発信、種々の活動を地道に続けていくことを使命としています。今年度は、ジェンダーセンターとして多様性の理解の範囲を広げるべく、障害者問題も取り上げました。今後も引き続きこうした取り組みを継続していきたいと考えております。

ジェンダーセンターに様々な方面から関心を持ち、ご協力・ご参加いただける皆様方のご支援により我々の活動は支えられております。併せてそれを実施するための運営委員の先生方、事務局スタッフの皆様のご尽力に対しても、ここに厚く御礼申し上げます。

2017年2月13日

明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター長  
細野はるみ





# 定例研究会





## 【第1回定例研究会】

# 摂食障害からの回復—臨床社会学の観点から

【講師】 中村英代 日本大学文理学部准教授

【略歴】 東京大学大学院修士課程修了、お茶の水女子大学大学院博士後期課程単位取得満期退学。(博士：社会科学)

専攻は社会学。摂食障害ほか、薬物依存などの依存症をはじめとする現代社会の生きづらさと、生きづらさを生む社会環境を研究テーマとしている。著書に、『摂食障害の語り—〈回復〉の臨床社会学』（新曜社 2011 第11回日本社会学会奨励賞・著書の部受賞）、近年の論文に、「誰も責めないスタンスに立ちつつ、問題の所在を探りあてる—摂食障害・薬物依存へのナラティブ・アプローチ」（『ナラティブとケア 第6号』 2015）、『ひとつの変数の最大化』を抑制する共同体としてのダルク—薬物依存からの回復支援施設の社会的考察（『社会学評論』 2016）などがある。

【主催】 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【後援】 明治大学学生相談室

【日時】 2016年5月25日（水）18:00～19:30

【会場】 明治大学駿河台キャンパス リバティタワー13階 1136教室

【来場者数】 24人

【コーディネーター】 出口剛司（東京大学大学院人文社会系准教授）

## 報告：出口剛司（東京大学大学院人文社会系准教授）

今年度第1回の定例研究会では、中村英代氏（日本大学文理学部准教授）をお迎えして、講演「摂食障害からの回復—臨床社会学の観点から」をお願いした。摂食障害といえば、女性特有の心の病というイメージがあり、ジェンダー論ともかかわりが深いと考えられている。中村氏の講演は、そうした従来型の研究スタンスに対する一つの挑



戦である。これまで摂食障害をめぐる言説は、疾病の原因をジェンダー規範、ジェンダー規範を押し付ける社会、社会に抑圧される心理に求めてきた。こうした一連の言説を「病因の言説」と呼ぶとすれば、氏の考察対象は「回復の語り」である。

まず、旧来型の「病因の言説」とはどのようなものか。それは端的に「なぜ、摂食障害に陥るのか」という問いを立てる言説である。しかし、そうした問いは「治療者」の視点、「研究者」のまなざしから発するものであり、ときに当事者の身体を意味づけ、患者を病のループに閉じ込めてしまう。すなわち、病因論が描く病のストーリーによって、身体が意図せず釘付けにされ、当事者の身体が病の主体として定義されてしまう。しかも病因を愛情不足、つまり家族関係に求めることにより、当事者は「家族問題」という新たな問題を抱え込むことにもなりかねない。このような観点から見ると、摂食障害からの解放をめざしたはずの病因論と実際の「病からの回復」は、必ずしも直結しているわけではないことがわかる。むしろ、両者は相反する関係に立つこともある。これまでの研究とは異なる「当事者」の視点に立った、しかも病因ではなく「回復」に軸を置いた言説、伝統的なそして社会学もそれに寄与してきた病因論とは異なる言説があるのかもしれない。中村氏の研究は、こうした疑問に積極的に答えようとするものである。



中村英代氏

むろん中村氏は、これまでの病因論的研究の成果を単に退けるのではなく、氏独自の方法で吸収し、新たな視点から書き換えることをめざす。それによると、私たちは摂食障害の原因＝病因を「食べ物」への依存に求めがちではあるが、実際には「痩せた身体」（観念・イメージ）への依存であることが示される。こうした中村氏の病因論から示される第一の処方箋は、逆説的にも「食事を抜かない」そしてそのことによって可能となる「吐かない」ということである。

しかし、中村氏が徹底してこだわるのは、身体を回復へと意味づけた「当事者の語り」である。当事者は「なぜ病に陥ったのか」という問いから、当事者は「どのようにして回復したのか」という問いへと、問いの形式が抜本的に変更される。そこで浮かび上が



2016年度 ジェンダーセンター 第1回定例研究会  
Meiji University Infocom Gender Center  
Seminar Series #1

### 摂食障害からの回復—臨床社会学の観点から

**中村英代 日本大学文理学部准教授**

講師紹介：東京大学大学院修士課程修了、お茶の水女子大学大学院博士後期課程単位取得満期退学。（博士：社会科学） 専攻は社会学。摂食障害ほか、薬物依存など依存症をはじめとする現代の生きづらさと生きづらさを生む社会環境をテーマにしている。著書に、『摂食障害の語り—〈回復〉の臨床社会学』（新曜社 2011 第11回日本社会学会奨励賞著書の部受賞）がある。



摂食障害（拒食症・過食症）の罹患者の多くが女性であることは、この病因が現代社会におけるジェンダー問題に起因する「女性の生きづらさ」に根ざしていることを示している。本講演では、その現実と社会的要因に関する認識を深めていく。同時に、回復者の事例に基づきながら、この社会のなかで人々はどうのように回復しているのかについて理解することを目指す。

**2016年5月25日（水）**  
**18:00～19:30（17:30開場）**  
**明治大学駿河台キャンパス**  
**リパティタワー 1136教室**

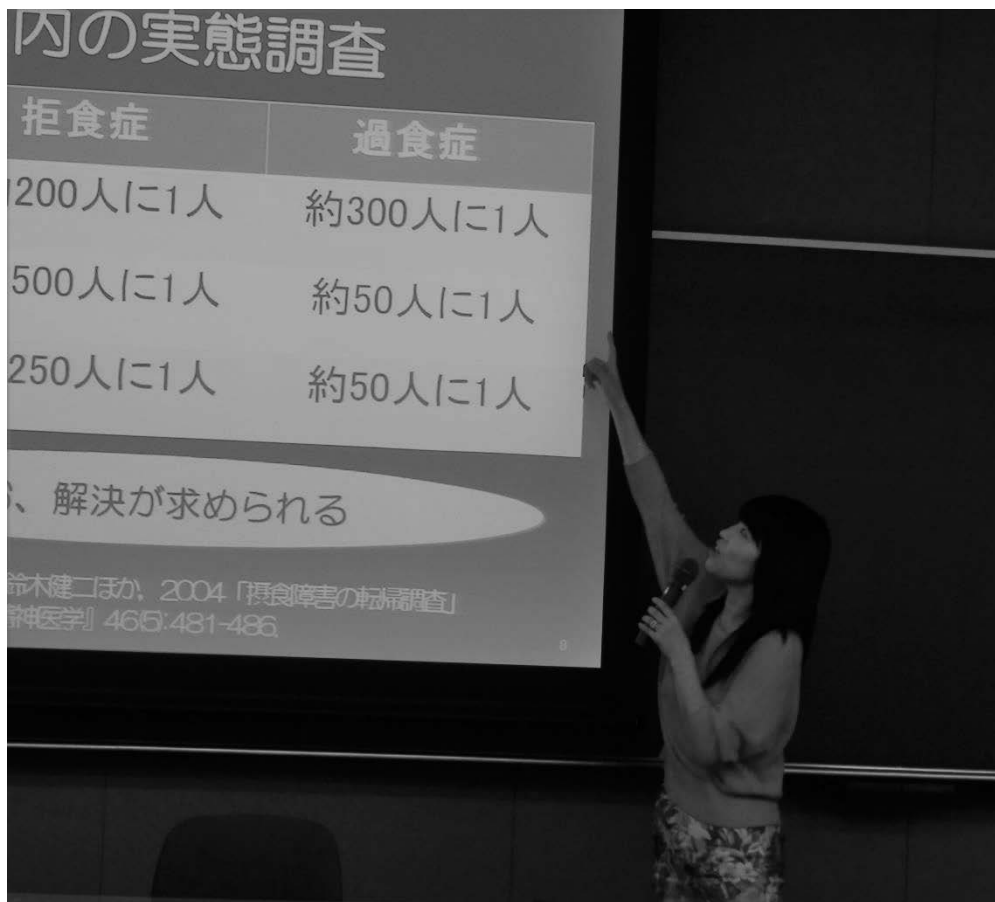
申込不要・入場無料 詳細は当センターHPをご覧ください。  
<http://www.meiji.ac.jp/infocom/gender/>  
主催：明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター  
後援：明治大学学生相談室

ってくる悪しきストーリーは、皮肉にも当事者が自己の身体を病として同定することによって循環構造に陥ることである。しかるに私たちが探求すべき語りとは、当事者が語りを通して人生の物語や意味づけを変化させ、別の身体を生きる回復の構造である。新しい意味づけの一つは、病を「私の問題」から「社会の問題」へと語り直すことである。しかし、もしそこにとどまるなら、疾因を社会に求める従来型の言説と変わらない。原因が社会にあったとしても、すぐに社会は変わらない、ではどうするのか？

こうした観点から、氏は匿名性に守られた自由な語りの空間を構築することの重要性を強調する。語りはそれ自体で苦しみを緩和し、安心を提供する。そして自分自身を不安なく自由に語る

ことで、抑圧的な社会構造やジェンダー規範によって拘束された身体から自分自身の身体が取り戻される。それが自由な語りの空間の効果である。ここで留意すべき点は、摂食障害の研究——それらはすでに指摘したように「治療者」や「研究者」の視点からなされる場合が多い——もまた、身体を病へと隔離する力をもつことである。誤解を恐れず言えば、そして中村氏の主張を延長すれば、従来 of 社会学的ジェンダー論もまたこうした隔離に与してきた可能性を拭い去ることができない。しばしば、脱構築をめざす構築主義が、構築される社会構造を解明するというその身振りによって、抑圧的な社会構造そのものを生産・再生産する場面に出くわす。その意味で氏の臨床社会学は、実在論から構築主義へと展開した社会学が依然として解放の力を持ちえないことへの異議申し立てとも理解できる。なるほど、従来 of 病因を特定し解明する告発型のジェンダー研究からは、同調主義、心理主義との批判も向けられよう。しかし、言説による意味付けに注目し、回復への道筋を描こうとする氏の研究は、間違いなく臨床社会学の新たな可能性を切り拓くものである。詳細は氏の名著『摂食障害の語り—〈回復〉の臨床社会学』（新曜社）に詳しい。







## 【第2回定例研究会】

# メインストリーム文化と LGBT

【講師】 フレデリック・マルテル氏

【略歴】作家、批評家、ジャーナリスト。社会学博士。パリ政治学院で教鞭をとった後、現在 CERI（パリ政治学院附属研究所）研究主幹。複数の書評、文化サイトの運営に関わり、ラジオ番組「ソフトパワー」のプロデューサー兼司会者でもある。著書に『超大国アメリカの文化力』（邦訳：岩波書店、2009）、『メインストリーム：文化とメディアの世界戦争』（邦訳：岩波書店、2012）、『現地レポート 世界 LGBT 事情』（邦訳：岩波書店、2016）がある。

【主催】 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【日時】 2016年11月23日（水）17:00～19:00

【会場】 明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント1階グローバルホール

【来場者数】 95人

【コメンテーター】 砂川秀樹氏（文化人類学者。『新宿二丁目の文化人類学：ゲイコミュニティから都市をまなぐす』著者。ピンクドット沖縄共同代表）

【通訳】 根本美作子 明治大学文学部教授

【コーディネーター・司会】 高馬京子 明治大学情報コミュニケーション学部准教授

### 報告：高馬京子（明治大学情報コミュニケーション学部准教授）

2016年11月23日、ジェンダーセンター2016年度第二回定例研究会としてフレデリック・マルテル氏『メインストリーム文化と LGBT』を開催した。

作家、批評家、ジャーナリスト、社会学博士であるフレデリック・マルテル氏は、パリ政治学院で教鞭をとった後、現在 CERI（パリ政治学院附属研究所）研究主幹を務める。複数の書評、文化サイトの運営に関わり、ラジオ番組「ソフトパワー」のプロデュ



ーサー兼司会者でもある。国内でも『超大国アメリカの文化力』（邦訳：岩波書店、2009）、『メインストリーム：文化とメディアの世界戦争』（邦訳：岩波書店、2012）、『現地レポート 世界 LGBT 事情』（邦訳：岩波書店、2016）といった翻訳書がすでに存在する。

いずれの著書も十以上の言語に翻訳され、二十か国近くの流通し、また、最近ではデジタル時代の産業と文化について調査をまとめた最新刊『スマート』もある。本研究会では、LGBT 文化について、インターネットやデジタルメディアがもたらす影響とは何かを中心に、LGBT の人権の問題とあわせご講演いただいた。

また、コメンテーターをお願いした砂川秀樹氏は、文化人類学者で、ゲイ・コミュニティに関する博士論文

『新宿二丁目の文化人類学：ゲイ・コミュニティから都市をまなぐす』を本としてまとめられ、様々なご論考を発表

されると同時に、ピンクドット沖縄共同代表としての活動

家でもある。砂川氏には、日本の LGBT について解説と、マルテル氏のご講演に対するコメントを頂き、最後には来場者からもマルテル氏への質問を受けつけた。フランス語でのマルテル氏の講演の通訳は、本学文学部根本美作子氏が担当された。

マルテル氏は、講演の中で、女性の人権、報道・言論の自由、市民のインターネット利用などの度合いによって塗り分けられた世界地図は、ゲイ解放の地図とほぼ一致すると指摘した。LGBT (Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender) の権利は今や基本的人権として認識されはじめており、LGBT 問題に対する各国の態度はその国の民主主義の成熟度や現代性を測る基準となるとしている。その一方で、同性愛が死罪の国は 10 か国、違法の国は 76 か国存在するとのことである。これら世界の傾向を約 50 か国の同性愛者たちのおかれている現状を取材しまとめた『世界 LGBT 事情』（岩波書店 2016 年）に基づき、LGBT 文化とその権利の世界諸国の異なるそれぞれの状況について、横断的なレポートを映像資料ともにご講演頂いた。

また、取材した各国のメインストリーム文化と同性愛の関係にも触れられ、同性愛を拒



フレデリック・マルテル氏



砂川秀樹氏

LGBTそれぞれのコミュニティやネットワークは基本的に別と指摘された。それらの動き、1970年代から2000年代にかけての日本、主に東京のゲイ・シーンの変化をメディア、対面的な場の中で通史的に考察していただくと共に、レズビアンやトランスジェンダー関連の動きも切り離しての考察を提示され、今後のLGBTと「ゲイ・コミュニティ」について、1)多面化、多層化、2)それぞれの国際化、3)LGBT内/「ゲイ・コミュニティ」内の差異の顕在化と摩擦(階層差感/意識、他の社会問題へのスタンス、民族主義、排外主義)を示された。

また、討論では、砂川秀樹氏のコメントのあと、会場から三橋順子氏からのコメントも提示され、LGBTという言葉に対する考え方、スタンスに関して、両者と、人権のためにLGBTという言葉を経営的に使用するマルテル氏との相違点が浮き彫りにされた。今回、来場者95名、内アンケートに答えてくれたのは54名であったが、そこでは、上記した相違点に関する討論をもう少し聞きたかったという意見(その後マルテル氏はLGBTとゲイ/GAYという言葉についての見解を『世界』2月

絶するアジアや中南米の国でも、フィクションの世界では、ゲイは容認される傾向が強いと指摘された。近年は、クリエイター、企業家など「創造産業」の担い手として、また、情報感度の高い消費者として、LGBTの経済的な重要性も注目されているとし、日本においても、日本のクールジャパン戦略にLGBT文化を利用する有効性について提言された。そして、インターネットの普及がLGBT解放にもたらした影響は計り知れないことも強調された。

コメンテーターの砂川秀樹氏からは、世界横断的に多様なLGBT文化を調査したマルテル氏の講演を受け、日本のLGBTと「ゲイ・コミュニティ」についてのコメントを頂戴した。日本では、LGBTという言葉が包括的に使われる傾向が近年若者の間でみられるが、実は

情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター  
第2回定例研究会

## メインストリーム文化とLGBT

**講師** フレデリック・マルテル氏  
作家、批評家、ジャーナリスト。社会学博士。パリ政治学院で教授をたった後、現在CERI(パリ政治学院付属研究所)研究主幹。複数の書評、文化サイトの運営に関わり、ラジオ番組「ソフトパワー」のプロデューサー兼司会者でもある。著書に『超大国アメリカの文化力』(邦訳:岩波書店, 2009)、『メインストリーム:文化とメディアの世界戦争』(邦訳:岩波書店, 2012)、『現地レポート 世界LGBT事情』(邦訳:岩波書店, 2016)がある。

通訳:根本美作子 明治大学文学部教授

2016年11月23日(水)17:00~19:00(開場16:45)  
明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント1階 グローバルホール

**コメンテーター** 砂川 秀樹氏  
文化人類学者。『新宿二丁目の文化人類学:ゲイコミュニティから都市をまなぐ』著者。ピンクドット沖縄共同代表。

司会:高尾京子 明治大学情報コミュニケーション学部准教授

申込不要・入場無料  
<http://www.meiji.ac.jp/infocom/gender/>  
主催:明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

メインストリーム文化とサブカルチャー、LGBTはどのようカル文化がせめぎ合うのか、インターネットやデジタルメディアがもたらす影響とは何か、トランス社会学者による来日講演。



号で対談という形で発表している)、その他、LGBT をめぐる世界の情勢、日本の情勢がわかってよかったという意見が聞かれた。今回の定例研究会におけるグローバルな視点と日本の視点からの LGBT に対する現状、見解の提示、また LGBT という言葉に対する認識の相違の提示により、LGBT をめぐる諸問題、課題についてさらに今後考えていくきっかけになればと考える。





# 上映会





## 【上映会】

# ドキュメンタリー映画「ちづる」上映会

【主催】 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【後援】 明治大学学生相談室

【日時】 2016年6月21日（火）17:30～20:00

【会場】 明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント グローバルホール

【来場者数】 82人

【コーディネーター】 細野はるみ（明治大学情報コミュニケーション学部教授、同学部ジェンダーセンター長）

【映画概説】 この映画の制作者の妹は重度の知的障害と自閉症を併せ持ち、独特の感覚に基づいたこだわりのために周囲とのコミュニケーションに困難を抱える。そのため、彼女の行動は日々の生活の中に予想外の展開を巻き起こしていく。ドキュメンタリーの中ではそんな千鶴と母の日常がカメラを通して映し出され、撮影する兄自身もその過程で家族と正面から向き合い、新しい関係を築いていく。もとは大学の卒業制作として撮影されたが、2011年秋に初めて一般公開され、人と人が共に生きていくということに一石を投じたドキュメンタリー作品である。

### 【プログラム】

・ドキュメンタリー映画「ちづる」上映

（監督・編集：赤崎正和／製作：池谷薫／2011年製作／79分）

・赤崎正和監督による講演

・森達也教授による映画コメント

・質疑応答

## 報告：細野はるみ（明治大学情報コミュニケーション学部教授）

ジェンダーセンターでは、ジェンダー問題を通して多様性の理解と共生社会の実現に寄与することを設立以来の目的の一つとしており、それはジェンダーに限らず、少数者の理解という点で視野を広げることでもあるのではないかという問題提起を含めた企画として、障害者とその周囲の人々を扱ったドキュメンタリー映画「ちづる」の上映会を実施した。

立教大学の学生として映像制作を学んでいた赤崎正和監督は、大学の卒業制作として





妹の千鶴を対象に選んだ。当初は、妹のことを友人たちにことばではうまく説明できず、映像ならできるのではと取り組み始めたが、撮影の過程で妹だけでなく自分や家族を見つめ直すことになる。自閉症は自閉症スペクトラムとも称され、発達障害の一種である。障害といっても身体活動に問題はなくことばも話せるため、周囲の人々にその困難さを分かってもらうのは逆に非常に難しい。自閉症には知的障害と重複する場合もそうでない場合もあるが、いずれにしろ周囲の状況の客観的な把握や適切な対応が難しく、本人なりの独特な文脈で理解する、「空気を読めない」人々である。日常の対人関係



赤崎正和監督

は周囲の人々も長年の経験の積み重ねの上で徐々に理解し受け入れていくしかなく、それが分からないとなかなか付き合うのは難しく、いきおい家族やごく近い人しかつながりが持たなくなって「社会性

も育ちにくい。この映画では、障害者本人だけでなくそれを支える家族の問題も浮き彫りにする。支援の仕方、社会との関わりの持ち方、ケアする家族の負担など、障害者問題としてだけではなく、高齢者や病人のケアにも共通する問題を提起している。

上映後の講演では、赤崎監督の講演と森達也情報コミュニケーション学部特任教授のコメントがあった。赤崎監督は、映像を通して表現したいという思いの根底には、自分にとって当たり前の家族のことを友人に話すことができない思いがあり、それに向き合わねばならないと取り組んだ、など映画制作にまつわる

明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター主催/明治大学学生相談室後援  
映画上映会  
妹が僕に映画をつくらせた。  
赤崎正和監督ドキュメンタリー作品  
ちづる  
©2011「ちづる」上映委員会 <http://chizuru-movie.com>  
重症の知的障害と自閉症をもった妹・千鶴は、独特の感覚に基づいたこだわりをもち、周囲とのコミュニケーションに困難を抱える。そのため、彼女の行動は、日々の生活の中に予想外の展開を引き起こしていく。ドキュメンタリーの中ではそんな千鶴と母の日常がカメラを通して映し出されるが、撮影する元自身もその過程で家族と正面から向き合い、新しい関係を築いていく。2011年秋に初めて一般公開され、人と人がともに生きていくということに一石を投じた、話題のドキュメンタリー作品を上映する。  
2016年 6月21日(火)  
17:30~20:00(開場17:00)  
明治大学駿河台キャンパス  
グローバルフロント グローバルホール  
映画上映(約80分)後、赤崎正和監督の講演、森達也特任教授の映画コメントがあります。  
入場無料・予約不要。イベントの詳細は当センターのHPをご覧ください。  
<http://www.meiji.ac.jp/infocom/gender/>

紆余曲折を語った。森教授は、カメラが介入することで対象の人物が変化する、この映



森達也特任教授（右）と映画制作についての話題が交わされた

画では被写体を晒すということに加えて身内の障害者を扱うという意味で二重三重の屈折があるが、自分を主語とすることでそれを描いている、とのコメントがあった。会場には、主人公の千鶴と同様に、不登校を経験し父も病死して母と兄の3人家族という自閉症の女性（実はジェンダーセンター長の娘）がおり、学校で困難な状況の時、そのうち

誰かが私と母を救ってくれるだろうと思っていたが、変わらないことは変わらないということが分かった、と当事者としての思いを語った。講演の後には会場からの質問や発言も多く、関心の高さがうかがわれた。

#### 【「ちづる」のあらすじ】

千鶴は外見からはどこが障害なのか分からない、むしろ非常に魅力的な若い女性である。映画はアイドルスターからの年賀状を受け取って喜ぶ彼女の姿から始まる。実はこの年賀状は彼女の母が書いて投函したものだが、アイドルが見ず知らずの彼女に年賀状をくれるわけがないとは理解できない。続く20歳の誕生日の場面では、ケーキと花束を贈られて家族に「お誕生日おめでとう」と祝われ、自分自身に対しても「お誕生日おめでとう」という彼女。対話の人称が混同したりするという自閉症特有の受け答えで、家族もそれを分かって対応している。

次いで場面は、好きなものを買に行きたい彼女が母親のお金を勝手に持ち出し、それに気づいた母が制止するのに対して力づくで抵抗する姿を映す。お金は誰のものか、買いたいものがあれば無制限に買っていいのか、といった「していいこと」と「いけないこと」の区別を理解させることの難しさ、それは「悪意」ではなく「したい」ことを貫こうとする純粹さに由来するのだが、その欲求が通らなければ身体を張って立ち向かう「家庭内暴力」、こうした困難なことのちりばめられた日常を兄はカメラを通して直視する。この母親との喧嘩は、彼女が大事にしている硬貨のコレクションに気を紛らわせたことであっけなく終息する。百円玉を製造年ごとにきれいに箱の中に並べたものだが、ものを潔癖すぎるほどに秩序立てて扱うという自閉症の一面を表している。

こうした家庭内の「わからんちん」である彼女に効果があるかどうか半信半疑で母は子犬を飼うことにする。千鶴は子犬がやってきた当初は戸惑いながらも、やがて「しつ



け」ということばを取り入れ、自分で「しつけ」をしようとする姿への変化に母は気づく。

一方、撮影者である兄は大学最終年での進路選択に悩み、妹に直面したことで障害者にかかわる仕事に興味を持ち、試行錯誤しながらも自らの道を見いだしていく。同時に、障害者施設を見たことで千鶴の今後の生活に選択肢があることに気づく兄。このまま千鶴を家庭内に置いたままでいいのか、試みに母は地域のセンターに連れて行ってみるが、そう簡単に千鶴はこちらの思うとおりに動かない。

一家の父親は数年前に自動車事故で他界しており、千鶴を見つめた1年は家族にとってもその後の生活について様々な問い直しをもたらした。故郷の福岡で新生活をはじめようと転居を決めた母、卒業後の進路に踏み出す兄、そして成人した千鶴。

#### 【来場者の感想】

アンケートには、参加者 82 名のうち 55 名からと多くの回答が寄せられた。おおむね好意的で、よい映画だった、有意義だった、映画だけでなく監督自身のことばが聞けてよかった、障害だけでなく子育てや多様性という面でも意味がある企画だった、等々の声が多数寄せられた。映画のラストシーンの千鶴の表情から、ことばではとらえきれない感動を受け、じっくり考えていきたい、という声もあった。今回の企画の特徴として、家族や知人に障害者がいる、自分自身が障害を持っている、等の声も多く、具体的な日常を描き出す映画から、身につまされる体験を持つがゆえの共感も多くあった。その意味で、自閉症当事者の発言がよかったという感想もいくつかあった。多様性に対する視野を広げての企画にも支持するという声が多数寄せられた。



## 【上映会】

### 映画「ハンズ・オブ・ラヴ 手のひらの勇気」上映会&トーク

【主催】 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【協力】 松竹（株）

【日時】 2016年11月15日（火）18:00～21:00

【会場】 明治大学駿河台キャンパス リバティタワー1階1012教室

【来場者数】 108人

【コーディネーター】 田中洋美（明治大学情報コミュニケーション学部准教授）

#### 【プログラム】

#### ◆第1部：映画「ハンズ・オブ・ラヴ 手のひらの勇気」上映

（ジュリアン・ムーア主演／ピーター・ソレット監督／原題：Freeheld／2015年製作／アメリカ／103分）

#### 【映画概説】

アメリカ・ニュージャージー州オーシャン郡。20年以上、警察官という仕事に打ち込んできた正義感の強い女性・ローレルは、ある日ステシーという若い女性と出会い、恋に落ちる。年齢も取り巻く環境も異なる二人は、手探りで関係を築き、郊外に一軒家を買ひ、一緒に暮らし始める。家を修繕し、犬を飼い、穏やかで幸せな日々が続くはずだった…。

しかし、ローレルは病に冒されてしまう。自分がいなくなった後もステシーが家を売らずに暮らしていけるよう、遺族年金を遺そうとするローレル。しかし法的に同性同士にそれは認められていなかった。残された時間の中で、愛する人を守るために闘う決心をした彼女の勇気が、同僚やコミュニティ、やがて全米をも動かしていくことになる…。

#### ◆第2部：トークセッション「日本のダイバーシティって何だろう？」（60分）

#### 【登壇者】

上川あや（世田谷区議会議員）

川田 篤（日本アイ・ビー・エム(株)ソフトウェア事業部部長）

齋藤明子（(株)ポーラ人事部ダイバーシティ推進チーム課長）

大森千秋（松竹(株)洋画調整室）

#### 【司会】

田中洋美（明治大学情報コミュニケーション学部准教授）

松岡宗嗣（明治大学政治経済学部4年）



報告：田中洋美（明治大学情報コミュニケーション学部准教授）

2016年11月15日（火）、本センターではアメリカ映画「ハンズ・オブ・ラヴ 手のひらの勇気（原題：Freeheld）」（2015年全米公開、<http://handsoflove.jp/>）の試写会とダイバーシティに関わる活動で実績のある方々をゲストにトークセッションを行った。この日は、国際寛容デー（International Day for Tolerance）の前日であった。これは1995年11月16日に採択された国連寛容宣言を踏まえ、国連が定めたものである。背景には、「人々は本質的に多様である。つまり寛容のみが世界各地の混成コミュニティを存続させることができるのだ。（People are naturally diverse; only tolerance can ensure the survival of mixed communities in every region of the globe）」（注）という考えがある。本センターは、寛容という言葉こそ使わなかったものの、この考えに共鳴し、同時期に本イベントを行うことにした。

映画「ハンズ・オブ・ラヴ」では、二人の女性のパートナーシップを軸に、警察という硬い体質の組織での女性やマイノリティの働きにくさ、社会における同性カップルの暮らしにくさなど、社会におけるさまざまな偏見やそれに基づく差別、そしてそれらと折合いをつけながら生きる人々の姿が実話を基に描れる。本映画が、性別、セクシュアリティ、人種、宗教、年齢・世代等に基づく差別撤廃、ダイバーシティ（多様性）推進の動きが企業や行政に起こりつつある現代社会について、またそのような社会で生きること

について考える上で優れた教材となりうるとの確信から、主として学生を対象に映画上映とインタラクティブなトークセッションから成るイベントを企画した。また当日の司会は、筆者とともに昨年本センターが行ったMEIJI ALLY WEEKの学生実行委員長を務めた松岡宗嗣さん（政治経済学部4年）が務めた。

当日は映画の上映から始まった。103分の上映後、会場は静けさに包まれていた。心を揺さぶるストーリーに涙を流した人々も少なくなかったようである。しばしの休憩を挟み、トークセッションが始まると会場は異なる雰囲気になった。

トークセッションには、上川あや氏（世田谷区議会議員）、川田篤氏（日本アイ・ビー・エム株式会社）、齋藤明子氏（株式会社ポーラ人事部ダイバーシティ推進課長）、大森千秋氏（松竹株式会社洋画調整室）の4名を登壇者としてお招きした。トランスジェ

全米の人々の心を動かした感動の実話を映画化！  
ジュリアン・ムーア主演/ビクター・ソレット監督/原題：Freeheld/2015年製作/アメリカ/103分  
 アカデミー賞短編ドキュメンタリー賞受賞作映画化作品・11月26日より全国一斉上映



映画上映会  
& トーク  
@明治大学

## ハンズ・オブ・ラヴ

手のひらの勇気

© 2015 Freeheld Movie, LLC. All rights reserved.

2016.11.15. Tuesday  
 ～11月16日の国際寛容デーに向けて～  
 OPEN 17:30 | START 18:00  
 @明治大学 駿河台キャンパス  
 リバティタワー1階1012教室

申込不要・入場無料

詳細：<http://www.meiji.ac.jp/infocom/gender/>  
 主催：明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター  
 協力：松竹純

**FILMSCREENING: ハンズ・オブ・ラヴ 手のひらの勇気**

20年以上、警察での仕事に打ち込んできた正義感溢れるローレル。ある日、ステイシーと出会い、恋に落ちる。年齢も取りまく環境も異なる二人は、手探りで関係を築き、郊外に一軒家を買ひ、一緒に暮らし始める。穏やかに幸せな日々が続くはずだったが、ローレルは病に冒される。自ら亡き後もステイシーが家を売らずに暮らしていけるよう、遺族年金を争奪せざるを得ない。同性同士には法的に認められていない。残された時間の中で、愛する人のため闘う決心をした彼女の勇気が、やがて多くの人を動かしていくことになる。

**TALK: 日本のダイバーシティって何たる？**

登壇者：上川あや（世田谷区議会議員）/川田篤（日本アイ・ビー・エム株式会社ソフトウェア事業部長）/齋藤明子（ポーラ人事部ダイバーシティ推進チーム課長）/大森千秋（松竹純洋画調整室）

司会：田中洋美（明治大学情報コミュニケーション学部准教授）/松岡宗嗣（明治大学政治経済学部4年）

\*トークはメディア取材により会場の撮影があります。



ンダーの議員として知られる上川氏は、実体験を基に映画が描いた主人公ローレルの境遇について理解を示した。

まず本映画の日本での上映は、国内配給を担当する松竹株式会社がこの映画の公開を決めたからに他ならない。トークセッションでは、本作品を見つけ、買い付け、公開に向けて動かされた同社の洋画買い付けチームのメンバーの大森氏に、買い付けの様子や公開に至るまでの過程についてお話いただいた。

大森氏らは年に3、4回ほど海外のいろいろな都市で行われる洋画の見本市に参加し、新作の情報を収集し、また日本での公開に向けての交渉などを行っているという。「ハンズ・オブ・ラヴ」については、2年ほど前にアメリカで行われた見本市で初めてその存在を知った。人が人を思うまっすぐな気持ちに純粋に感動し、すぐに台本を取り寄せた。



その後、年が明けて、ベルリン映画祭でこの映画の抜き出し映像を見る機会があったが、短い映像にもかかわらず非常に心を揺さぶられたことから、ぜひとも日本で公開したいと強く思ったそう。ただチーム

#### トークセッションで多彩な登壇者たちから思いや考えが述べられた

の中に同性同士の恋愛に違和感を感じる者もいたため、帰国後、社内で意識調査を行った。結果、否定的な見解がほとんどないことを確認し、公開を本気で考えるようになったという。公開に向けて本格的に動くようになったきっかけは、その後参加したトロント映画祭であった。ワールドプレミアとして一般聴衆とともに映画を観賞し、多くの人が涙を流し、感動している様子を目の当たりにしたという。

このような日本上映に至るまでの背景を踏まえつつ、登壇者らにより映画のストーリーを踏まえての様々な見解が呈示された。上川議員は、実体験を基に次の2点を強調された。第一に、映画の舞台アメリカだけでなく日本においてもマイノリティが生きづらい社会であること、第二に、しかしながら社会は変わりうる、ということである。映画の中では、必ずしも望むような形ではなかったかもしれないが、主人公の望みは叶う。上川氏は、性別を変更する制度をつくるために議員になり、実際にそれを成し遂げた人物であるが、この体験からも、映画が描いた「成功」はアメリカだけの話ではないこと、日本でも制度がないからと諦めずに、方法を探り、戦略的に動くこと（例えば、政治家



にならなくても役所にハガキを出し、問題を訴える、つまり憲法で保障されている請願権を行使する等) で変化が起こりうるということが指摘された。

一方、川田氏は、職場で 50 代になってからゲイであることをカミングアウトし、現在は性的マイノリティに関するさまざまなイベントやメディア報道に出る等、活躍されている。今回この映画を見て、性的マイノリティをめぐる法整備が遅れた日本において自らが同じ状況に置かれており、涙なくして観ることができなかったというお話が冒頭にあった。また映画の中でさまざまな人々がさまざまな形でローレルを支援している様子が描かれていることを指摘し、最終的にはどういう関係性を作っていくかという人間性の問題であると述べた。

斎藤氏は、企業でダイバーシティ推進を担当する立場から、まず映画の中で描かれる性別ゆえの生きづらさについてコメントがあった。現在、日本でも多くの企業においてダイバーシティ推進が行われるようになってきているが、その大きな柱となっているのは女性の働きやすさの実現である。このことと絡めて、ローレルとそのパートナー、ステイシーは、職業は異なるが、共に男社会で働いており、女性であることを理由になんらかの「差別」を経験していること、またそのような構造とうまく折り合いをつけながら生きていくことの指摘がなされた。その上で、現在、性別やセクシュアリティに関係なく誰もが働きやすい社会の実現を目指した動きが企業を含むさまざまな組織で起こりつつあり、社会は確実に変わりつつあるということが重ねて強調された。

このような登壇者からの話を受けて、司会の松岡氏より、アライ (ally、性的マイノリティの支援者として使われつつある言葉) という言葉の重要性に改めて気づいたとの言葉があった。

質疑応答の時間では学生たちからも手が挙がった。就職活動を控えた女性の学生は、女性が人口の半分を占めているにも関わらず、映画に登場する人々、特に主人公を助ける人々は、ローレルの主治医を除き、ほとんどが男性であるのを見て、社会で力を持つのは結局男性なのだろうかと感じてしまったと述べた。その上で、2016 年現在はどうなのだろうかと思うか、また意思決定に関わる人々が男女半分ずつになるのはいつだと思うかという質問があった。この質問に対して、登壇者から次のようなコメントがあった。まず上川議員は、男性と女性の両方で働いた経験から社会においてジェンダーの格差があるとした上で、現在は議員として女性であっても勉強してスキルアップすることで変化をもたらすことができるという力強い言葉をいただいた。川田氏、斎藤氏からは、職場には女性であっても有能な社員がいること、ただし社員に男性が多い会社と女性が多い会社では組織文化が異なる傾向があるという話があった。組織文化によって組織内でどう動くかも変わってくる。斎藤氏は、文化が変わるには時間がかかることから、どういう組織に身を置くかをよく見て、選ぶことが大切であるという指摘があった。

セクシュアルマイノリティであるという別の学生からは、趣味の世界においても多様性が問題となっているとの発言があった。趣味のコミュニティにおいて自分のセクシ



アリティを打ち明けられずに悩んだが、今では年配の方々にも受け入れていただいております、違いを受け入れる方向に変化が起きているのではないかという発言があった。このことについて川田氏からは、差別を認めない法律が必要ではないかとの指摘があった。というのも、多様性を良しとする考えを持つ人が増えつつある一方で、差別意識のある人もおり、「ノー」という権利を主張する人もいるからである。

最後に、登壇者からは、声を上げ、幸福を追求することの大切さが繰り返し強調された。性的マイノリティをめぐる状況は、同性婚や性別変更等が認められるようになるなど、制度整備は大きく進みつつある。しかし人々の意識の変化はまだ限界つきであるといえよう。こうした状況を打破するためには、より多くの人のアライ（ally、性的マイノリティの支援者を指す言葉として近年使われつつある）となることも重要だろう。そして、このアライという言葉は、司会の松岡氏が指摘したように、セクシュアリティだけでなく様々な差異にまつわる困難を抱える人々を支援する人々という意味でも使うことができるだろう。

以上、イベントの概要である。この企画が現在の社会について理解を深め、今後あるべき社会の姿を構想する契機となったのであれば幸いである。

最後に、今回のイベントは、松竹株式会社とのコラボ企画であった。映画の試写およびトークセッションの実施にあたり、松竹関係者の方々より多くのご支援を頂戴した。この場を借りて心より感謝したい。

注：1)国際寛容デーに関する国連サイト、2017年1月20日閲覧

<http://www.un.org/en/events/toleranceday/background.shtml>

#### メディア報道

The Japan Times. “Freeheld’ stirs talk of minority rights in Japan.” 1 December 2016, p. 11. <http://www.japantimes.co.jp/culture/2016/11/30/films/freeheld-stirs-talk-minority-rights-japan/#.WEoaL8JKOEc>

NHK ラジオ第1、毎週金曜 22:00-23:10 「NHK ジャーナル」11月18日（金）映画コーナーにてイベント紹介（企画者、学生のインタビューあり）

MovieWalker 「映画：LGBTが自分らしく生きるためには？50代でのカミングアウトがもたらした希望」2016年11月16日10時53分

<http://news.walkerplus.com/article/92719/>

GENXY 「ダイバーシティを考える、LGBT映画「ハンズ・オブ・ラブ」のトークイベントが開催」2016年11月16日 [http://genxy-net.com/post\\_theme04/1116316/](http://genxy-net.com/post_theme04/1116316/)





## 他機関との連携・協力





## 女性研究者研究活動支援事業

### 総括シンポジウム「Life Sharing～共に前へ～」

共催：明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【主催】明治大学男女共同参画推進センター女性研究者研究活動支援事業推進本部

【共催】明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

明治大学法科大学院ジェンダー法センター

【日時】2016年12月8日（木）第1部 14:00～17:00

第2部 17:30～19:15

【会場】明治大学駿河台キャンパス

第1部 グローバルフロント1階多目的室

第2部 グローバルフロント1階グローバルホール

MEGED 平成26年度文部科学省科学技術人材育成補助事業  
「女性研究者研究活動支援事業(一般型)」

女性研究者研究活動支援事業  
**総括シンポジウム**  
Life Sharing  
～共に前へ～

事前登録不要  
参加無料

開催日 **2016年12月8日(木)** 無料託児ルーム開室

明治大学駿河台キャンパス  
(千代田区神田駿河台1-1)

【第1部】14:00～17:00 ※13:45開場  
グローバルフロント1階 多目的室  
◆サイエンス・サポーター制度利用者による報告会及び意見交換会  
◆資料映像上映会  
※女性法曹界の道を開いた人々—明治大学専門部女子部の足跡—

【第2部】17:30～19:15 ※17:00開場  
グローバルフロント1階 グローバルホール  
◆女性研究者研究活動支援事業成果報告

主催/明治大学男女共同参画推進センター女性研究者研究活動支援事業推進本部  
共催/明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター  
明治大学法科大学院ジェンダー法センター

明治大学男女共同参画推進センター  
女性研究者研究活動支援事業推進本部  
〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1  
明治大学駿河台キャンパスアピアカミーコ7階  
TEL:03-3296-4655 / FAX:03-3296-4656  
Email:danjo@meiji.ac.jp URL:http://muged.meiji.jp/

11月30日締め切り  
申込先 TEL.03-6913-8484  
備考MATE東京支店 平日(9-18)9:00-18:00

ご案内  
明治大学  
駿河台キャンパス

【概要】明治大学は2014年10月に文部科学省の「女性研究者研究活動支援事業」に採択された。2016年度はその最終年となるので、これまでの成果を表明するための総括シンポジウムを以下の2部構成で開催した。

第1部 サイエンスサポーター制度利用者による報告会及び意見交換会

司会 細野はるみ、ファシリテーター 小林正人（推進本部生田分室長）

「サイエンスサポーター」は本事業により発足した制度であるが、実際に利用した3名の若手研究者（男性も）から感想や問題点の指摘があった。

資料映像上映会「女性法曹界の道を拓いた人々—明治大学専門部女子部の足跡—」

明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター協力

当ジェンダーセンターの研究プロジェクトから生まれた資料映像の上映を行った。



## 第 2 部 女性研究者研究活動支援 事業成果報告

司会 小林正人

成果報告 辻村みよ子(推進本部代  
表)

この事業の内容と現時点での成果  
の報告があり、今年で終わるが、引  
き続き次の事業にも応募して大学  
全体のダイバーシティ環境の整備  
を図るとの発言があった。

特別講演 山村康子(国立研究開発  
法人科学技術振興機構プログラム  
主管)

明治大学では女性の社会進出の  
ための高等教育でも他に先んじて  
おり、また情報コミュニケーション  
学部ジェンダーセンターも様々な

活動をしているが、文部科学省の支援による事業はこれが初めてである。この事業によ  
って、遅まきながら大学全体での男女共同参画の意識が高まり、男女ともに学びやすい、  
働きやすい環境の整備へと機運が高まった。当センターとしても今後とも協力・連携し  
ていくべきであろう。



女性研究者研究活動支援事業の成果が報告された



## IGS 国際シンポジウム

「なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか？」

ジェンダーと多様性から考える 2016 年大統領選挙」

後援：明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【主催】お茶の水女子大学 グローバル女性リーダー育成研究機構 ジェンダー研究所  
JAWS（日本アメリカ女性シンポジウム）

【後援】明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【日時】2017年3月18日（土）13：30～17：00

【会場】お茶の水女子大学共通講義棟1号館304号室

### 【プログラム】

#### <特別講演>

メリッサ・デックマン（Washington College）  
「トランプ時代におけるジェンダー・ギャップ—  
2016年大統領選で女性有権者の投票行動から何を学ぶか」

ジュリー・ドーラン（Macalester College）  
「女性大統領候補—2016年大統領選におけるジェンダーの役割」

#### <ラウンドテーブル>

「多様性の視点から見たトランプ政策」  
メリッサ・デックマン（Washington College）  
ジュリー・ドーラン（Macalester College）  
メリアン・ペイリー（University of Delaware）  
武田 宏子（名古屋大学）  
申 琪榮（お茶の水女子大学）

How far have we come in equal political representation?

なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか?

Lessons from the 2016 presidential election in the US

ジェンダーと多様性から考える2016年大統領選挙

**特別講演**

メリッサ・デックマン (Washington College)  
トランプ時代におけるジェンダー・ギャップ  
2016年大統領選で女性有権者の投票行動から何を学ぶか

ジュリー・ドーラン (Macalester College)  
女性大統領候補  
2016年大統領選におけるジェンダーの役割

**ラウンドテーブル** 多様性の視点から見たトランプ政策

メリッサ・デックマン (Washington College)  
ジュリー・ドーラン (Macalester College)  
メリアン・ペイリー (University of Delaware)  
武田 宏子 (名古屋大学)  
申 琪榮 (お茶の水女子大学)

【日時】2017年3月18日 土 13:30-17:00  
【会場】お茶の水女子大学共通講義棟1号館304号室

主催：お茶の水女子大学 グローバル女性リーダー育成研究機構 ジェンダー研究所  
JAWS（日本アメリカ女性シンポジウム）  
共催：明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター



# 研究プロジェクト





2016 年度 研究プロジェクト A

女性専門職の過去，現在，未来

Women in professional occupations: the past, the present, the future

細野はるみ・吉田恵子・平川景子・長沼秀明・岡山礼子・武田政明

男女平等意識が浸透してきたと思われる 21 世紀の現在でも、女性の社会参画は必ずしも順調には運んでいない。社会的責任の重い立場の女性の割合は諸外国に比べて格段に低く、仕事と家庭の両立に悩む女性の問題も相変わらずである。

本研究では近代社会確立期の日本における女性の専門職、特に医師・看護師・弁護士に焦点を当て、時代思想、社会情勢、文化的文脈などを総合的に分析・検討し、その形成と発展の歴史的背景を明らかにすることを目的とする。ここでは「専門職」を「高度の専門性と自律性に裏付けられた社会的地位の高い職業」と定義して、男性の職業と衝突する面、逆に女性であることが有利に働く面などにも注目する。伝統的に産婆は女性の職業とされ、その延長上で、女医にはある種の病気に適するとも見なされた、など。加えて幕末から明治期という時代が戦争の多発、特に外国との戦争で銃による負傷の多発を招き、医療面の整備を要請した。これらの職業は公認の資格を要するため国家の介入は不可欠であるが、医療方面での医師や看護師は明治 10 年代よりその資格などが論じられたのに対し、法曹界での弁護士資格は大正デモクラシー期を経てからと、同じ専門職でも展開の時期は分野によって約半世紀の開きがある。また、これら女性の専門職の先駆者たちを生み出すに当たって、男尊女卑の伝統的観念から比較的自由でありえた男性の理解者の存在も無視できない。さらに、専門職に就くことを可能にするための教育の環境整備も不可欠である。そうした周辺の諸問題や時代の意味も問うていく。

§ 2016 年度の成果 §

これまでの共同研究では医師・看護師・弁護士それぞれを分担して研究してきたが、研究が進んでくるにつれ、相互の連関性や異質性の比較の観点からも検討できるようになってきた。女性が専門職に就くことの意味やその得失も問題となる。また、近代という時代、日本における特殊性なども総合的に加味することが出来るようになった。女性専門職の一部の輝かしい人材について個人的人生史の「女性性」が強調されがちだが、その特殊性に収斂させるのではなく群像としての存在意義を浮かび上がらせ、総合的観点からの検討を踏まえて今日的な意義を明らかにしたい。こうした研究成果を 2016 年度内には書籍としてまとめる計画であったが、諸般の事情で一部やや遅滞している。引き続き鋭意努めて、2017 年度の早い時期には完成させる予定である。



2016 年度 研究プロジェクト B

メディアにおける男性身体・女性身体のセクシュアル化

The sexualization of male and female bodies in Japanese media

田中洋美・石田沙織

ジェンダーとメディア研究では、1990 年代以降、女性身体の性的モノ化の傾向が一層強まっていること、また女性身体のみならず男性身体もが性的なまなざしの対象とされるようになってきていることが指摘されている。また 2000 年代以降は、こうしたメディア表象におけるセクシュアル化には、若い女性を中心に自己セクシュアル化の傾向が強まっていることも指摘されている。本研究プロジェクトでは、日本においても同様の傾向が観察されることを踏まえ、それを学術的に捉え、議論すべく、日本のメディアにおける身体表象のジェンダー分析を行う。

分析にあたっては、ジェンダーとメディア研究の鍵概念のひとつである「セクシュアル化」(sexualization) に関する先行研究を参照し、その知見を踏まえて日本のメディアにおける男女の身体表象の特徴を実証的に把握することを試みる。特に日本ではまだ議論されていない男性身体のセクシュアル化と女性身体の自己セクシュアル化の二つを軸に考察したいと考えている。これらの作業を通して、ジェンダー表象に関する学術的な議論に新しい知見を加え、貢献することを目指す。

なお分析データは、1991 年に先駆的に男性ヌード特集を行ったことで知られる女性誌『an・an』の創刊号(1970 年)から 2015 年末までに刊行された全ての号の表紙である。過去 45 年間のデータを網羅的に分析し、時代的推移と近年の動向を検討する。

§ 2016 年度の成果 §

今年度は女性誌『an・an』の表紙のコーディングを行った。結果、創刊号から 1990 年代までの分の作業をほぼ終えることができた。



2016年度 研究プロジェクト C

組織におけるダイバーシティー推進とその課題

Diversity management in the organization and its problem

牛尾奈緒美

組織におけるダイバーシティー推進は、組織の競争優位の確立や、利益拡大、組織全体の活性化や有効性を高めるなど、多くの意義があることが確認されている。

しかし、同質的な組織価値観のもとで長年運営されてきた組織にとって、ダイバーシティー推進は容易ではない。推進の過程で生じる各種の組織的問題点や、成員間のコンフリクトなど、さまざまな課題について検討し、解決策を模索する。

ダイバーシティーの具体例としては、女性、障がい者といった伝統的組織における少数派と目される人々を対象とし、分析していきたい。

§ 2016年度の成果 §

今年度は、ダイバーシティー推進における個別企業の取り組みや経営者の考え方などについて聞き取り調査を行うとともに、既存の実証データに基づき統計解析を行った結果を学会発表並びに論文等の形で公表した。

インタビュー調査は地方都市に本拠地を置く企業に対しても実施し、ダイバーシティー推進の潮流が首都圏のみならず全国的に広がってきていることが確認された。業態や組織文化、人事管理における慣習の如何によって進展の度合いは異なり、解決すべき課題も多様であった。

こうした質的調査に加え、経年的に行っている質問紙調査で得られたデータをもとに統計解析を行い、女性管理職の抱えるメンタルヘルスに関する実証研究の結果を発表した。具体的には職場内ストレスの原因となる組織的問題を明らかにするための意識調査で、ストレス要因の実態をマネジメント、人材育成、人事制度、組織風土の観点から考察した。19社21955人の従業員を対象とし、性差と職位の組み合わせにより対象者を4つ(①男性非管理職、②女性非管理職、③男性管理職、④女性管理職)に区分し、各グループ間で、「職場内ストレス(ストレス要因)」の捉え方や、「ストレス反応(ストレスによる心理的・身体的影響)」は異なるのか統計的解析を行った。(尚、詳細結果は同社研究員との共同研究(牛尾・志村・宇佐美 2015)として学会発表した。)その結果、総じて女性管理職は女性の非管理職や男性管理職、非管理職よりもストレスが強い傾向にあることが示され、それへの対応が必要とされる現状が明らかにされた。最後に、今年度からは女性問題に加え障がい者雇用の問題も視野に入れ調査を開始することとし、当該問題に関する事例研究や文献研究も行った。





2016年度 研究プロジェクトD

戦後の女性誌がライフスタイルに及ぼした影響

The impact on women's life style by magazines after the World War II

江下雅之・川端有子

日本の女性向け雑誌、とりわけ主婦向けの総合誌と少女向けの娯楽誌は大正時代に部数を急拡大させた。この傾向は第二次大戦によって中断させられたが、戦後まもなく多くの女性向け雑誌が復刊あるいは創刊された。とりわけ戦後の洋裁ブームのなかで、服飾関係の雑誌の登場や、既刊誌におけるモード関係の記事の拡充が顕著であった。

1970年以降は、ファッション誌が女性誌のなかで急成長を遂げる。かつて若い独身女性の「おしゃれ」は不良の行動と見なされた時期もあったが、戦後世代の台頭により、おしゃれは徐々に若者のライフスタイルの重要な要素となってきた。この時点でおしゃれの情報源であり教科書役を担った媒体が雑誌である。逆に、雑誌は読者の嗜好や動向を探って誌面をつくっていた。両者は若者のライフスタイル形成において相互作用的な関係を維持していたのである。

本プロジェクトにおいては、こうした相互作用的な関係を系統的かつ実証的に分析することを目指す。先行研究によれば、戦後ユースサブカルチャーは映画や雑誌の影響を強く受けており、そして80年代以降は通念的な「若者文化」が成立しえず、徐々にユースサブカルチャーズが並立し、それに沿って雑誌の多様化が進んでいる。本研究においては、とりわけユースサブカルチャーズの並立過程に注目するとともに、ある世代集団が年齢を上昇させるにつれて確立するライフスタイルの変化にも着目し、いわば横方向と縦方向の系統において、いかなる雑誌がいかなるタイミングでいかなるサブカルチャーズと親和的であったのかを検証する。そのために、主要な雑誌の主要な年次分を収集し、コンテンツの整理と体系化を進めるものである。

§ 2016年度の成果 §

太平洋戦争の終結は人びとのライフスタイルも劇的に転換し、その変化は、女性の服飾にとりわけ濃厚にあらわれている。

服飾の面の変化では、和装から洋装への転換が庶民レベルで全国的に拡大した点があげられる。戦時中にいわゆる「もんぺ」を着用していた多くの女性は、戦争後、かつての和装に戻るのではなく洋装を選択する。それにとまって洋裁がブームとなり、若い戦争未亡人が洋裁で生計を維持しようとし、それがさらに洋裁の普及を促す循環をうみだした。

また、戦後の復興は女性の職場進出を促した。その後「BG」と呼ばれる彼女たちは親世代とは異なり、居住地から離れた場所への通勤という行動を実践する。これにより通勤服の



需要が励起された。

こうした状況のなかで、若い女性たちに洋装の最新モード情報や製作のための実用的な情報を供給したのが、『装苑』『スタイル』などの服飾研究誌である。この二誌は、洋裁学校の支援のもとで戦前に創刊され、戦争中に休刊されたが昭和 21 年には復刊している。そして昭和 30 年には同ジャンルの月刊誌『若い女性』が大手出版社の講談社より創刊された。

若い「BG」の日常的な通勤と洋装という実践は、当時の多くの母親には未体験なものであったため、親世代は適切な助言を与えられない。結果、服飾研究誌は「BG」の服飾に関する主要な情報源となった。なかでも『若い女性』は部数を大きく伸ばす過程で服飾以外の生活情報や読み物を増やし、徐々に総合情報誌としての役割を果たしていく。

2016 年度の研究プロジェクトにおいては、『装苑』『スタイル』『若い女性』のバックナンバーを実際に収集し、前述の展開を裏づけるグラビアおよび記事を体系的に整理した。また、過去に収集した同時期のフランスの女性誌を参照に、戦後に刊行された日仏の女性誌の比較をおこなった。その成果の一部は私的な研究会等で発表した。



2016年度 研究プロジェクト E

現代フランスと日本のメディア言説によって構築された  
規範としてのカップル像の自己／相互表象

**The auto / mutual representations of couples as norms constructed through  
contemporary French and Japanese Media discourses**

高馬京子・アメリ コーベル

本研究は、現代フランスと日本のメディア言説を通して、いかに規範となる「カップル」像を自己／相互形成されてきたか、比較考察するものである。

日本では、「フランス婚」(事実婚の意『実用日本語表現辞典』)といった言葉で語られるほど、日本と異なるフランスの特異性として、サルトル・ボーヴォワールの関係で知られるように法制度ではなく、女性の自立に基づいた非婚関係の恋愛を重んじる事実婚といったカップルが多いというイメージが抱かれている。しかし、フランスでは、日本と異なり、カップルを結ぶ法的な形式として「結婚」だけではなく、「パックス(民事連帯契約法)」(1999年)、「みんなのための結婚(同性婚)」(2013年)といった、様々な「選択肢」が提示されているにも関わらず、2015年12月に発表されたL'INSEE(フランス国立統計経済研究所)によると、フランスのカップルが選んだカップルの形態は結婚が最多で73%、ユニオン・リーブル(事実婚)23%、パックスは4%、また、日本の国税庁のデータと合わせ見ると、フランスでは離婚も多いといわれながらも絶対数で比較すると日本の約2分の1という現実もあり、ある種イメージと現実のギャップが感じられる。

本研究では、実際、このようなギャップの間で構築されたフランスの「カップル」像の役割について考察するために、日仏メディアにおいて、

- ①「規範」となるフランスの「カップル」像がいかに言説によって形成されてきたか、
- ②その「規範」は日仏社会にとっていかに必要とされたのか
- ③それらを形成し、正当化するそれぞれの社会構造／言説編成体とはなにか

を明らかにするために、伝統的な媒体である新聞、雑誌、及びデジタル・メディア、また、外国人向け語学教材といった社会「規範」を国内外向けに形成・発信する役割をもつ日仏の様々なメディアにおける「結婚」「離婚」「恋愛」「家族」等に関する記事を資料体とし、日本の「カップル」像との比較も射程にいれつつ、そこで形成される規範としての日仏のカップル像の自己／相互表象を言説分析を通して考察する。

§ 2016年度の成果 §

本研究プロジェクトでは、共同研究者にパリ政治学院博士後期課程のアメリ・コーベル氏



を迎え議論をし、本研究の問題意識の下、具体的に、現代日仏において、カップルを題材として放映されているテレビ番組に着目し、それらテレビ番組において規範としてのカップル像が形成されているか、またそれに対する視聴者、世論はどうそれに対して意見を提示しているかについての考察を計画した。様々な形態がある中で今回テレビ番組を選んだのは、一般大衆向けにメディアが形成する現代の規範としてのカップル像形成を考察するには、テレビという大衆向けメディア、さらには以下に示すようにフランスの民放チャンネルで長きに渡り放映されているカップルに関する番組が、本テーマ課題を検討する上で相応しいと考えたからである。

研究準備第一段階として、2016年度は、①フランスのテレビドラマにおける規範としてのジェンダー表象に関する先行研究を *(Dé)assignation de genre dans les médias* (Trepanier-Jobin 2014)及び *L'assignation de genre dans les médias*. (Damian-Gaillard 2014)を中心に、1950年代以降のその歴史的変遷に関する調査結果、及びその「ジェンダーの割り当て」「ステレオタイプ」「パロディー」「期待、混乱、期待の再編成」「記号語用論」等をキーワードに、テレビドラマにおける規範としてのジェンダー形成を分析する方法論の考察をした。②それらを元に、現代フランスのメディアでは、どのように規範としてのカップル像が形成されているかを考察、分析するため現在フランスの民放番組M6で放映されている、フランスのカップルに関するドラマ *Scène des ménages* (夫婦喧嘩) (2009年から)、*En famille* (家族で) (2012年から)を分析対象とした。前者は異「人種」カップル、30代から70代までの幅広い年齢層の様々な夫婦の日常に焦点が当てられ、後者では、三世代の家族の日常が描かれている。そこに描かれる規範としてのカップルの表象分析を今後すすめるが、フランスで同性婚法が施行された2013年を調査年度とし、規範としてのカップル像の多様性も考察する。今後も調査、分析を続け、日本の状況と比較検討し、将来的に共同研究成果の発表機会をもちたいと考えている。



# 業績一覧 (2016 年度)





## ジェンダーセンター運営委員業績一覧（各 50 音順）

### \*\*\*論文\*\*\*

牛尾奈緒美（2016）「女性の活躍を促す法務部づくり」ビジネス法務, vol.16(2), pp.60-64.

松山真太郎・金本麻里・牛尾奈緒美（2016）「女性管理職, 男性管理職のストレス・プロセスの比較—ストレス・コーピングの成功要因に着目して—」第 32 回産業・組織心理学会大会発表論文集, pp.137-140.

### \*\*\*著作\*\*\*

高馬京子（2017）（3 月末刊行予定）「第 9 章 少女—フランス女性読者のアイデンティティ—形成とキャラクターの役割」山田奨治編『マンガ・アニメでレポート・論文を書く』ミネルヴァ書房

高峰修（2016）「暴力とセクシュアル・ハラスメント」日本スポーツとジェンダー学会（編）『データで見る スポーツとジェンダー』八千代出版, pp130-136, 142-147.

Hosono, H. (2016). Women and Expression in Japanese Society. Joshi, D. U. & Permpoonwivat, Ch. K. (Eds.), *Equating gender: Explorations in the Asia-Pacific*. Jaipur: Rawat Publications, pp.120-128.

Tanaka, H. (2016). Women's Political Participation in Japan: What Stirs their Political Ambition and What Promotes their Candidacy. Joshi, D. U. & Permpoonwivat, Ch. K. (Eds.), *Equating gender: Explorations in the Asia-Pacific*. Jaipur: Rawat Publications, pp. 106-119.

Yamaguchi, I. (2016) Gender issues in the organizational attitudes and behavior of Japanese care workers. Joshi, D. U. & Permpoonwivat, Ch. K. (Eds.), *Equating gender: Explorations in the Asia-Pacific*. New Delhi, India: Rawat Publications, pp. 146-162.

### \*\*\*コラム\*\*\*

牛尾奈緒美（2016）「女性の離職減らすには 昇進・キャリア説明丁寧に」日本経済新聞, 2016 年 4 月 29 日朝刊, 「経済教室」



**\*\*\*学会発表・報告\*\*\***

松山真太郎・金本麻里・牛尾奈緒美 (2016) 「女性管理職, 男性管理職のストレス・プロセスの比較—ストレス・コーピングの成功要因に着目して—」 第 32 回産業・組織心理学会大会における学会発表, 立教大学, 2016 年 9 月 3 日.

高馬京子 「トランスナショナルコミュニケーションにおける *kawaii* の形成: 日仏の事例を中心に」カルチュラルスタディーズ・タイフーン 2016、東京藝術大学, 2016 年 7 月 2 日.

Koma, K. (2016). Legitimation of *Kawaii* as a Japanese Culture through Perpetual Acculturation?: A Case of Lolita Fashion Representations in Tokyo, Paris, and Otaru. ヨーロッパ日本研究学会日本第二回大会, 神戸大学, 2016 年 9 月 25 日.

Koma, K. (2016). Poster session *Shojo Manga Acculturated in Various Form in France in 21th Century's Transnational Communication*. at 10th Conference of the International Committee for Design History & Design Studies: Making Trans/National Contemporary Design History, National Taiwan University of Science of Technology, October 26-28, 2016.

高馬京子 (2016) 討論者コメント発表「かわいい/カワイイ/*kawaii* のアルケオロジーの視点から」日本マスコミュニケーション学会メディア文化部会研究会「ポスト〈カワイイ〉時代のメディア文化を考える」, 大阪市立大学, 2017 年 2 月 17 日.

田中洋美 (2016) 「ジェンダーとメディア再考—スポーツ宣伝動画をめぐる騒動を例に」国際ジェンダー学会 2016 年大会, 一橋大学, 2016 年 9 月 11 日.

Tanaka, H., and Ishida, S. (2016). The Meaning and Purpose of Leisure Activities of Manga/Anime Fans Called *Fujoshi*: Contradictions and Ambivalences in Japanese Women's Fan Community. Paper presented. at The Third ISA Forum of Sociology, International Sociological Association, University of Vienna, July 11, 2016.

**\*\*\*講演・講座\*\*\***

牛尾奈緒美 (2016) 「女性の輝く社会をつくる! 専業主婦から再出発、「思い込み」の解消でキャリアを拓く」銀座新ロータリークラブ主催講演会, 帝国ホテル, 2016 年 8 月 1 日.



牛尾奈緒美（2016）「女性リーダーを組織で育てるしくみ」日本ホテル協会主催「第34回トップセミナー」講演会，ホテルニューオータニ，2016年9月27日．

牛尾奈緒美（2016）「メディアにおける男女共同参画に関するパネルディスカッション」コーディネーター，議会における女性活躍及びメディアにおける男女共同参画について聞く会主催，内閣府中央合同庁舎8号館1階講堂，2016年10月17日．

牛尾奈緒美（2016）「専業主婦からの再出発：アナウンサーから大学教授への道」未来開花塾（食品業界企業の女性管理職の会）主催講演会，日本橋浜町Fタワープラザ3階ホール2016年10月31日．

牛尾奈緒美（2016）「女性活躍は「思い込み」の解消から：専業主婦からの再出発でキャリア構築」名古屋ロータリークラブ主催講演，名古屋観光ホテル，2016年11月22日．

牛尾奈緒美（2016）「専業主婦からの再出発でキャリアを拓く・・・これからの女性活躍に必要なこと」慶応ビジネススクールM30代の会・EMBA交流会主催講演会，ホテルグランドパレス，2016年12月11日．

細野はるみ（2016）「女性研究者活動支援事業総括シンポジウム～ Life Sharing Life Sharing Life Sharing 共に前へ～」コーディネーター・司会，女性研究者研究活動支援事業推進本部主催・情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター・法科大学院ジェンダー法センター共催シンポジウム，明治大学駿河台キャンパスグローバルフロント，2016年12月8日．

細野はるみ（2016）ワークショップ「ワーク・ライフ・バランス」女性研究者研究活動支援事業推進本部主催「駿河台メンタリングランチ会」，明治大学駿河台キャンパスグローバルフロント，2016年11月29日．

細野はるみ（2016）ワークショップ「ワーク・ライフ・バランス」女性研究者研究活動支援事業推進本部主催「生田メンタリングランチ会」，明治大学生田キャンパス支援事業推進本部生田分室，2017年2月28日．





## 2016 年度 ジェンダーセンター運営委員会会議録

第 1 回運営委員会 2016 年 4 月 15 日

第 2 回運営委員会 2016 年 5 月 20 日

第 3 回運営委員会 2016 年 7 月 15 日

第 4 回運営委員会 2017 年 1 月 20 日



## 2016 年度 ジェンダーセンター運営委員

### ●委員長兼センター長

細野 はるみ

### ●副委員長兼副センター長

田中 洋美

### ●学部内委員

山口 生史

牛尾 奈緒美

江下 雅之

宮本 真也

波照間 永子

高馬 京子

### ●学部外委員

高峰 修（政治経済学部）

### ●学外委員

出口 剛司（東京大学）



## 編集後記

ジェンダーセンターのポリシーの一つに「ダイバーシティ」が含まれるようになったものの、世界はその逆の方向へと向かいつつある。それぞれの国の指導者たちは調和や、一体感を求めることはしているが、それはあくまでもマジョリティや、「フツー」の価値観に同調していくことへの要求でしかない。そう考えれば、ジェンダーセンターの存在意義はますます高まっていると思うのだが、しばしば心配になるのは、人びとがそれを望んでいるのかどうか不安になる事態に直面することが多いことである。今に始まったことではないと言われればそれまでだが、次の春にはもう少し明るいことが書けるように、前に進みたい。

ジェンダーセンター運営委員 広報担当 宮本 真也

ジェンダーセンターの運営委員、広報委員となってようやく一年を迎えました。ジェンダー、多様性（ダイバーシティ）、承認をキーワードとする定例研究会、映画上映会等、様々な本ジェンダーセンターの活動内容を改めて報告書という形で、ご参加いただいた方、またご参加できなかった方あわせて多くの方にご覧いただき、さらなる議論につながっていただきたいと思います。来年度どのような報告書をまとめられるのかを楽しみにしながら2017年度もさらに活動を推進していきたいと思っております。

ジェンダーセンター運営委員 広報担当 高馬 京子

環境問題に取り組んでいる知人が、動物学者ジェーン・グドールの言葉である「私たちは一日として周りの世界に影響を与えていない日はない」を引用しながら、私たちがやるだけでなく、やらないことも未来に影響を与えていると語った。特に「やらないこと」の結果の影響はすぐにはわかりにくいですが、百年単位の視点で見れば確実に大きな違いを生むという。その時は、知人がそういう視点を持ちながら日々環境問題に取り組んでいるのだなと、ただ聞いていたが、考えてみると、ジェンダーやダイバーシティの問題にも通底する重要な視点である。最近の世界的な自国中心主義やマジョリティ優遇への揺れ戻しの中で、様々に行われてきたジェンダーやダイバーシティへの取り組みは塵灰に帰すのではないかと懸念を感じる。しかし、むしろ真に注意しなくてはならないのは、あきらめによって、百年単位のスパンの中に姿を現す大きな結果を見失うことの方なのだと考えさせられた。

ジェンダーセンター事務局 岩崎 美香



ジェンダーセンター年次報告書 2016

## ジェンダーセンター年次報告書 (2016年度)

- 
- 2017年3月31日発行
  - 編集・発行 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター